

ICTを活用した国際連携によるアクティブラーニング実践の研究

～国をまたいだInquiry LearningとCollaborative Learning～

キーワード 協働学習 国際理解 アクティブラーニング 主体的情報活用能力

学校名 大阪市立東高等学校

所在地 〒534-0024
大阪府大阪市都島区東野田町4-15-14

ホームページ
アドレス <http://swa.city-osaka.ed.jp/swas/index.php?id=h523502>

1. 研究の背景

現状の日本では生徒が国際舞台で的確に情報発信するには、教師の積極的な体験場面設定が不可欠である。情報発信の手法や型である演繹的序論、本論、結論展開は、この実体験により効果的に獲得することが可能となる。本申請メンバーは、国際連携課題解決学習に取組、協議、プレゼンテーションにおいては、多くの知見がある。これら実践から、探求の共同体（Garrison, 2011）などの先行研究に学び、ICT 活用時の認知的存在感の向上、対面での社会的存在感向上のための基準を明らかにしてきた。一方で、国際連携課題学習は有志教員により行われているのが実情であり、継続的なものとするためには、各科目における対応範囲の明確化していくなどが課題となっている。これらの現状を踏まえて本研究のテーマ設定を行った。

東高等学校では、平成 23 年度より 28 年度まで文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の指定を受け、先進的な科学教育を推進してきた。既存のコンピュータ教室 40 台の生徒用コンピュータと普通教室などで活用できるノート PC24 台に加えて、タブレット 40 台が整備されている。しかし、現状で、大阪市の指針により、教員及び生徒がフレキシブルに利用するためのコンピュータ機器の新規購入が困難な状況である。現状ある共通設定の PC では、学校間交流等の校外イベント参加を含む実践の、情報共有やデータ処理などにおいて、さまざまな不具合が生じていたが、この助成によってこのような予算措置面での課題解決の一助となった。

2. 研究の目的

継続的な国際協働学習を通して、アウトカム・デザインとインターネット活用モデルを構築することを目指した。具体的には、情報伝達力、交渉力、合意形成力など、高等学校段階において求められる「グローバル人材」の基礎力とそれを支える ICT 活用能力を明らかにし、これら力を育成するための取組の教科への具体的な展開事例を示すことをめざした。

実践としては、海外教育省（高雄市教育局）の協力のもと、生徒の深い理解を達成するために有効とされる Inquiry Learning(探求学習)と Collaborative Learning(協働学習)の手法を用いて、国際連携アクティブラーニングに取り組む。夏・冬の二度にわたり国際プレゼンテーション大会での発表機会を設定し、対面協働作業を通じた Conflict Resolution の体験をさせる。「相手を知ること(See)・体験すること(Feel)」にとどまらず、生徒たちに「内面化・生活化(Internalize)」させるところまでの活動を実施する。授業での取組とす

ることで継続性を保障することをめざした。

3. 研究の経過

本研究の授業実践に関しては、主として情報科の科目「社会と情報」で実施し、教科横断的にさまざまな学習を進めた。情報科の指導目的の柱である主体的な課題解決能力の育成を念頭に置き、実践研究活動を以下のようにフェーズで行った。

事前：図や写真、グラフを提示しつつ進める事前交流、プレゼンテーションの作成

対面：コラボレーションのための英語、ICT活用、交渉力の実践、プレゼンテーション作成

事後：協働プレゼンテーション実施場面の記録による評価、リフレクション

参加生徒や教員へのアンケート調査に加えて、フェイストゥフェイスの活動機会をとらえたインタビュー調査、さらに参加した生徒の進路を追跡調査するなど、本取組の成果を多面的な評価・検証を進めた。授業における共同研究の相手校としては、主に台湾高雄市立瑞祥高級中學、前鎮高級中學と生徒研究チームを形成した。実践を通して、生徒の主体的情報活用能力の高め、課題解決能力を育むのに効果的な授業モデルプランの確立をめざした。

4-7 月

海外共同研究相手校の教員とのミーティング

授業においてマルチメディアの操作・処理とネットワークの活用について習得させた

生徒研究チームで海外連携校と研究テーマ策定・研究活動開始

ネット利用で交流相手校とのミーティング

7-8 月(夏季休業期間)

夏季休業間を利用して先行事例研究を開始

ワールドユースミーティング国際プレゼンテーション大会参加 (愛知県)

研究経過の報告を基本とした海外交流相手校との生徒による共同研究発表

高雄市教育局との連携で、滞在受け入れによる交流活動

共同研究の中間まとめ

交流相手校と夏の国際交流活動の結果と協働研究経過の報告による情報共有

今後の研究指針の再確認を行った

9-12 月

生徒協働研究テーマ研究継続

第42回日本教育工学会全国大会参加 (島根県) 取組について担当教員が研究発表

12 月(冬季休業期間)

ASEP アジア太平洋学生交流大会プレゼンテーション大会参加 (台湾高雄市)

研究成果報告を含む海外交流相手校との生徒による共同研究発表

ホスト校滞在による交流活動

参加教員は大会公式教員ワークショップ参加

他の参加校による交流事例の研究

1 月～

生徒による研究成果のまとめ、リフレクションレポート

報告書作成 最終報告・評価

4. 代表的な実践

夏季休業期間に日本愛知県東海市で実施のワールドユースミーティング国際プレゼンテーション大会と冬季休業期間に台湾高雄市で実施のASEPアジア太平洋学生交流大会プレゼンテーション大会への参加生徒の引率指導を行った。

1) World Youth Meeting 2017

大会日程 8月3日～4日 日本福祉大学東海キャンパス(愛知県東海市)

交流日程 7月31日 海外チーム来日 空港出迎え 各地でホームステイ開始
～8月3日 ホームステイ期間

各地でホスト校中心の交流活動 発表準備の協働作業

8月5日 海外チーム移動 (愛知県から大阪府へ)

8月6日 大阪エクスカージョン 生徒によるボランティアガイド

8月7日 空港見送り 海外チーム帰国

大阪市立東高等学校の取組

高雄市立瑞祥高級中學・高雄市立前鎮高級中學とプレゼンテーションを実施 二チーム

参加生徒のホスト校としてホームステイ受け入れ5名

大阪エクスカージョンの生徒ボランティアガイド参加 22名



写真① 校内でプレゼン準備の協働作業



写真② プレゼンテーションの様子



写真③ アクティブラーニングセッション



写真④ 関西空港での見送り

2) Asian Students Exchange Program 2017

大会日程 12月28日 高雄市立三民家商（台湾高雄市）

交流日程 12月26日 東高校チーム高雄入り 空港出迎え ホームステイ開始

12月27日 記者会見 教員研修プログラム 教員交流会

～12月30日 ホームステイ期間

ホスト校中心の交流活動 27日までは主に発表準備の協働作業

12月29日 エクスカーション ホスト校によるアレンジでアクティビティ

12月30日 空港見送り 帰国

大阪市立東高等学校の取組

ホスト三校 高雄市立瑞祥高級中學・高雄市立前鎮高級中學・高雄市立高雄工業高中

各ホスト校と事前交流 テレビ会議・SNSなどネットワーク活用

校内での参加生徒対象事前研修

各ホスト校とプレゼンテーションを実施 三チーム

ゲストとしてホスト校のホームステイプログラムに参加 生徒14名

教員研修・交流プログラムに参加 教員2名



写真⑤ 前鎮高中チームの結成時



写真⑥ ホスト校でのリハーサル



写真⑦ 記者会見での取材
(現地テレビ局の映像)



写真⑧ 記者会見での参加国共同宣言



写真⑨ プレゼンテーションの様子



写真⑩ 瑞祥高中チームと会場で撮影



写真⑪ 前鎮高中チームの記念撮影



写真⑫ クロージングセレモニー 表彰



写真⑬ 高雄高中チームエクスカーション



写真⑭ 前鎮高中の授業体験

5. 研究の成果

「違う」を埋める ICT 活用の観点・・・話し合いだけでは進めない高校生へのサポートを ICT 活用に求める。国際協働作品制作のための ICT 活用の知見を蓄積できた。video conference の活用、協議のための手順、論議をサポートするための図やチャートの活用などが実践研究により実現した。本実践は教室内でシミュレーション的に行う実習ではなく、情報ネットワークと ICT 機器を活用した国際的な協働作業という現実的な活動をとまなうものであった。主体的な情報活用能力育成のための効果的な授業コンテンツのサンプルになると考えられる。本助成により学校の予算措置では十分に実施することが難しいが、最も重要な実践の柱となるフェイストゥフェイスの協働作業による協働プレゼンテーションと海外での教員交流が実現でき、国際的

な実証を受けている「探求学習」の実効的な国際モデルを提示する礎となった。

高校レベルでのグローバル人材育成の観点・継続的な学校間国際交流活動が取組の中心となる本実践の記録が、「距離」「意識」の隔たりを克服する教育効果の高い実践プランのモデルとして活用できることが見込まれる。近年、学校における国際交流活動の大きな課題として、単に思い出づくりの道具として交流活動が行われているという、いわゆる交流搾取問題があげられる。参加者相互の将来的なキャリアにこの学びが生きる (Internalize) という本研究の成果が、国際交流活動をとまなうさまざまな実践においてモデルとなり、交流校相互の教育方法の改善に広く活かされていくことを期待している。

6. 今後の課題・展望

本実践研究で生徒たちが取り組む国際共同研究は、継続的に発展させていきたい。国際プレゼンテーション大会だけでなく、将来的に国際学会等の学術的な発信場面に参加できる生徒の育成も研究成果に求めたい。

また、さまざまな学校において、新たに同種の活動に取り組む場合や、今までの活動の改善を必要とする場合の知見として実践の成果を積極的に伝達し情報共有を図りたい。

7. おわりに

今回の助成によって、海外での交流実践活動を効果的に遂行することができた。しかし、大阪市立の公立学校の現状では海外での交流活動や実践研究活動については、コスト面のみならずさまざまな制約があり自由な実践研究活動は難しい。今回の成果や知見を積極的に発信し、国際交流活動の活性化につなげていくとともに、より多くの機会で海外での充実した活動が実現できるように、各方面に継続的かつ積極的に働きかけを続けていきたい。

今回の一連の実践からも、国際連携課題解決学習は生徒の生きる力を育み、主体的情報活用能力を伸長し、国際化に対応した人材の育成に大きく寄与することは明らかである。今後も、国際交流を柱とした実践によるより充実した成果をめざしたい。

8. 参考文献

- ・「翼をもったインターネット国際交流マニュアル」 影戸誠 著 ‘2003 日本文教出版
- ・「コンピュータ教育のバグ」 池田明 著 ‘2005 日本文教出版
- ・「国際協働プロジェクト ASEP&WYM の実践と課題」
吉田信介 著 関西大学高等教育研究第8号 ‘2017